

拝啓 今年も早や5月下旬となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。吹く風さわやかで、新緑がきれいな時期となりました。わが家の玄関わきの軒下では、いろいろな色のスイトピーが、2m以上の高さまで伸びて咲いていて、育てた本人と道行く人々の目を楽しませてくれています。

今回は、小西芳之助先生の『わが主イエスよ—恵心流キリスト教・説教集—』の6回目で、「第7講 称名の意義」からの引用です。10 ページ「私の信仰をあらわす一つの文章」という項には、次のように書かれています。

「内村先生が、『我々の信仰が一つの文章になるまでは力がない』と、『自分の信仰生活を導く力がない』と仰せになりました。私は先生のその言葉に励まされて、私の信仰を一つの文章にしました。最近出来た文章でありますから、これを、何遍も言っていますから、みなさんごぞんじでしょうが、もういっぺん申し上げます。

生きれば称名、このままで、目の前のなすべきをなし、死ねば天国、キリストに迎えらる、その時の喜びやいかん。されば、生きるも死ぬるも賜物。」

確かこの言葉には、小西先生の教えのすべてが凝縮されています。

親友の米倉安雄さんが、入退院を繰り返しておられますが、毎日のように電話を下さいます。「毎日、一日中、わが主イエスよ、わが主イエスよ、と主の名を呼んでいます」とおっしゃって下さいます。小西先生の教えを実践して下さっています。

4月29日(月)、パーキンソン氏病の友人村野憲政さんを含めて6人で、高尾山に登り、頂上から城山まであるき、相模湖に下りました。村野さんは、パーキンソン氏病の深頭部手術をされたあと初めての山行でしたが、足取りも軽やかにハイキングされ、手術の効果が絶大であったことを示して下さい、一同おおいに喜びました。5月18日には、その村野さんを含めて3人で、横浜市長津田にある「こどもの国」に行き、外周道路を中心に2万歩ほどのハイキングもしましたが、この時も軽快でした。

5月11日(土)には、薛恩峰先生の会が目黒の自然教育園の研修室であり、報告の後自然教育園の中を歩きましたが、山手線のなかに実に大きな森が残されています。

5月16日は、南原先生を主人公とする歴史小説『夏の坂道』の著者村木嵐(らん)さんをご案内して、多磨霊園の南原繁先生のお墓に参り、『夏の坂道』の出版の報告をしました。南原先生のほかに、矢内原忠雄先生、新渡戸稲造先生、内村鑑三先生、吉野作造先生、三谷隆正先生、美濃部達吉先生のお墓参りをして、祈願をされました。

私はいろいろな分野の違う活動をやっていますが、只今南原研究会のある企画で難しいことに会っておりますが、その間童謡の会で歌を歌いに行ったり、ハイキングに行ったり、あらかじめ組んでいた予定のために、大いに助けられる感じがします。パークレー先生の言われるパレルゴン(専門外の活動)が大切だということを感じます。

どうぞ皆様も、お身体ご自愛のほど、祈り申し上げます。

2019年5月23日

山口周三

エンカウンターのご読者各位